


 巻頭言

コロナ禍を経ておもうこと 学会発表のすすめ



佐賀県果樹試験場 **え とう とも き**
衛 藤 友 紀

今年の2月から九州病害虫研究会の会長を仰せつかりました。1925年に設立された伝統ある本会（次年度100周年）の活動がより活発となるように尽力したい所存です。本会は九州・沖縄地域の病害虫研究の発展と病害虫防除法の普及を図ることを目的として活動しており、現在（2023年12月時点）の会員数は正会員284名、購読団体59団体、法人会員26団体の計369です。

さて、2020年以降新型コロナウイルス感染症のまん延のために様々な行動が制限されてきました。もちろん、学会発表等も例外ではありませんでした。感染症の流行により、Webが主体となった発表会、こんなことができるのかと当初は感嘆していましたが、やはり何か物足りませんでした。その後昨年5月に本症が2類から5類に移行したことで、制限されてきた行動も徐々に緩和され、すべてとは言えませんが、従前と変わらない状況になってきました。本会でも昨年からは口頭発表のみとなりました。確かにWeb発表も有効な手段の一つではありますが、やはり対面による口頭発表は発表者や質問者の生の声を聴くことで、研究に対する「情熱」、「刺激」を得ることができて、恥ずかしながらもこの歳になって改めて対面発表は良いものだと感じました。講演数もコロナ前とほぼ変わらない状況まで回復したので、今後さらに事務局・会員とともに盛り上げていきたいと思えます。

ところで、ご存じの通り植物防疫を取り巻く環境は非常に複雑かつ多様化していることを受け、これに対応するために昨年植物防疫法が改正されました。有害動植物の国内への侵入、さらにはまん延の危機が懸念される中、日本の西南端に位置する九州・沖縄地域は中国大陸に近いこともあり、これまでも多くの病害虫の侵入・被害を受けてきました。トビイロウンカ・コブノメイガ等の長距離移動性害虫をはじめとして、近年では九州北部で「ミカンコミバエ種群」が毎年捕獲されており、また昨年は中国でナシ・リングの「火傷病」の発生が認められたことから、ナシ花粉の輸入が停止になったことを受

け、関係機関・生産者は一丸となって花粉確保に対応したところでした。本病の日本への侵入はナシ・リング生産の存亡にかかわる非常に重大な問題であることから、引き続き警戒しているところです。研究機関としてはこれら新奇・難防除病害虫の生態解明、効率的な発生予察技術および効果的な防除技術を構築していく必要があります。本会としては上述のように地域特有の課題を含めて、様々な話題（技術）の共有化、さらに議論を深めて、ブラッシュアップできる有効な場となっています。個人的な話になりますが、私も学生時代にハスモンヨトウの長距離移動をテーマに発表した記憶があります。人前で話をするのが苦手だった私も、どうにかしてわかりやすく、制限時間内で終わらせるように頑張っていたと思います。そんな意味でも個人的には、本会は学会発表の登竜門の一つと思っています。各地域には本会と同じような伝統ある研究会がありますので、若手研究員・学生の皆さんの発表・投稿を期待しています。

近年、公設試験場の人事異動が非常に盛んになっており、若手研究員も例外ではないとよく耳にします。そのため彼らの発表する機会も以前からするとかなり減っていることでしょう。試験研究、それは生産現場にイノベーションをもたらす大変やりがいのある職種だと思います。若手研究員の皆さんは研究職に就いたことに喜びを感じ、自らの研究成果をどんどん積極的に世の中にアピールすることが大切です。成果を世に出すことで、人脈のネットワークが自然と構築され、研究にもさらなる深みが増してくるものと思います。これは学生の皆さんにも同じことがいえます。彼らがそのような場面に出会った際、先生、上司、先輩の皆さんは温かく、時には厳しく背中を押してやってください。そうすることで、試験研究の活性はもちろん、生産現場への寄与にも繋がるものと思います。最後に各関係学会および地域研究会の今後ますますの発展を祈念して閉じさせていただきます。

（九州病害虫研究会 会長）